日本精神衛生学会
MENTAL HEALTH
NEWS LETTER

令和2年2月28日発行
第 111号
事務局　〒169-0051　東京都新宿区
西早稲田2-18-23スカイエスタ507
TEL/FAX　03-6457-3921
E-mail　n.s.e.g@d7.dion.ne.jp
http://www.seishineisei.gr.jp/

〈目　次〉

日本精神衛生学会第35回大会　印象記……1
日本精神衛生学会第36回大会のお知らせ……3
日本精神衛生学会第35回大会に参加して……3

日本精神衛生学会第 35 回大会 印象記

日本精神衛生学会第 35 回大会事務局長　川崎 隆（別府大学）

さる2019年12月7、8日に、九州大分県別府市の別府大学にて、日本精神衛生学会第35回大会が開かれました。大分県別府市はご存知のように、温泉で有名な場所です。出張先としては喜ばれる場所かもしれませんが、遠方開催の学会はえてして足を運びにくいものではないでしょうか。それにも関わらず、当日は 75 人の先生方が参加してくださりました。改めて御礼申し上げます。

私は第 35 回大会に事務局長として参加しました。併せてシンポジストとして発表もさせていただきました。シンポジウムは中野明徳先生がご企画された「エビデンスとはなにか」を看護・福祉・心理それぞれの視点から考えるというもので、フロアの先生方と一緒に、悩ましくも刺激的なテーマと向き合うことができました。心理はエビデンスを重視する一方で数字面（づら）通りには捉えず多様な可能性を模索するといった趣旨のご意見があり、なるほどとか、そうだろうかとか色々な視点から今なお咀嚼し続けている、味のあるお題を頂戴できたと思います。シンポジウムの刺激的な時間も印象的でしたが、その後偶然下の階でシンポジストの大谷先生、河野先生とお会いし、看護・福祉・心理で輪になって「自分のところの領域はエビデンス、研究はしっかりしていない。あなたの領域はしっかりしていて羨ましい」と嘆息し合ったのもまたとても印象に残っています。そうみえるとそうであるは違うこともあるというのはクライエントとよく話すテーマですが、三者ともあるいは業界として同様のことが起こっているんだなと考えました。多様な職種が顔を突き合わせて議論できる本学会だったからこそできた体験なんだと思います。

事務局長としては、色々気を揉んだように思いますが、こうして振り返ってみると、私がこれをしたのだと自慢できることが少ないような気がいたします。私は事務局長ではありましたが、ほとんどの仕事をせず、多くのことを多くの方々にしていただきました。会場を抑えるのは大会長が、大会ページの管理等は副大会長が、

お弁当の発注はある先生が、当日の司会は本学OBの先生が、休憩室のマネジメントを本学OGの先生が、といった具合です。実際、私がしたことといえば、いくつかの細々とした仕事と中間管理職的な役割、そして学生のボランティアリーダーくらいでした。学生に募集をかけ、応募者のシフトと業務内容を調整し、マニュアルを作成しました。

大会スタッフは教員だけではカバーしきれず本学の学生・大学院生に手伝ってもらいました。大会に参加された皆様は、正門、受付、メイン会場、シンポジウム会場、休憩室と至るところに学生がいたことにお気づきになったかと思います。決して十二分に学生ボランティアがいたというわけでなく、限られた人数を(私が)むらなく配分し、それぞれが頑張ってくれた結果です。卒なく進んでいるように見えた進行も実はばたばたでして、メインホールの機材の動かし方、フロアのマイクの動かし方やスライド中の動画の音声調整等は、数日前に担当の学生と私が詳しい人に習って、講演の裏側でどきどきしながらやっていました。ボランティアマニュアル1ページ目には「大会の質は学生ボラで決まるといっても過言ではありません。参加者が来てよかったと思えるように、親切に、丁寧に、自信をもって接するようにしてください」といれましたが、学生達はそのままに、大会運営の裏方という慣れない仕事を上手にサポートしあい、時に私たちの準備不足を補って、参加された皆様をもてなしてくれました。

夜の大懇親会は学校法人別府大学の創立 100 周年事業として開館しました大分香りの博物館1階にあります「カフェ サ・サンボン」にて、影山理事長方のクラリネット四重奏の美しい音色から始まりました。著書や論文でしか拝見したことのなかった大先生とお話させていただいたり、先生方からうん十年前のエピソードを教えていただいたりと、貴重な時間を過ごすことができました。懇親会の至るところで、学生ボランティアがよかったとお褒めの言葉をいただいたのも非常にうれしかったです。笑い声の絶えない素敵な夜でした。本大会を通じて、私には様々な人との出会いと発見がありました。

次回 36 回大会(浮田徹嗣大会長)は、横浜市立大学にて開催されます。また皆様と大会会場にてお会いできるのを楽しみにしております。

日本精神衛生学会第 36 回大会のお知らせ

日　程：　2020 年 11 月 7～8 日

会　場：　横浜市立大学

大会長：　浮田徹嗣（横浜市立大学）

詳細は次号ニュースレターでお知らせいたします。
皆様のご参加をお待ちしております。

日本精神衛生学会第 35 回大会に参加して

齋藤佑美・田山真稀子（常磐大学大学院修士課程2年）

2019 年 12 月 7 日と 8 日に日本精神衛生学会第 35 回大会が開催されました。大会長は別府大学の西村靖史先生。大会テーマは「メンタルヘルスから考える地域生活」でした。私たちは 2 日間にわたり、大会に参加させていただきました。1 日目は発表での参加。私たちにとっては、初めての学会発表でした。私たちは茨城県に住んでおり、今回が人生初の大分県、人生初の九州地方でした。そんな初めて尽くしとなった本大会へは、緊張半分、わくわく半分の心持ちでの参加となりました。

発表は口頭とポスターの2種類がありました。口頭発表は、中野明徳先生の気さくで和やかな司会進行のもとで開催されました。口頭発表の方には、私たちの同期の1人が参加。修士論文の研究について発表しました。発表後は、諸先生方から豊かな臨床経験に基づいた様々な意見を頂戴しました。このように、広範囲に及ぶ領域からの多種多様なご意見を頂けるのが、学会ならではの魅力ではないでしょうか。これこそが学会参加の醍醐味であると確信致しました。

本稿を書かせていただいた齋藤と田山は、ポスター発表の部に参加。修士論文研究の内容について発表させていただきました。厳しいご意見もどんとこいと構えていたのですが、予想に反し、私たちにお声を掛けてくださった先生方の様子は、とても優しく柔和でした。そんなこんなで発表中は、和気藹々とした雰囲気に包まれ、他愛もないお喋りを挟みながら、リラックスして先生方とお話しを楽しむことが出来ました。発表の合間に、気になるテーマの発表をされている先生方のところへお邪魔し、研究の解説をしていただくにとどまらず、先生方の豊富な経験から培ってきた知見、臨床現場で働くときの心構え、院生のうちに取り組んでおくと良いこと等をご教授いただきました。私たちは大学院修了後、心理職として臨床現場に携わっていくことを目標としています。本大会中に諸先生方から戴いたお言葉を、これからの糧としていきたいです。

２日目は影山隆之先生がコーディネーターとして開いたワークショップ「自殺対策ゲートキーパー研修のつくりかた」に参加させていただきました。

ワークショップの前半では、ゲートキーパーについての講義と各地でのゲートキーパー研修の取り組みの報告が行われました。近年の日本が自殺対策に力を入れているのを知ってはいたのですが、恥ずかしながらゲートキーパーという言葉に触れたのは今回が初めてでした。しかし、ゲートキーパーとはどんなものなのか、どういった点で重要なのかが講義と報告を通して、初学者でもとても分かりやすく、理解を深められました。

後半では、ゲートキーパー養成研修を企画するグループワークを行いました。グループワークをご一緒させていただいた方々が県や市の職員の方だったので、県や市という規模だからこそできること、逆に難しいことがあると知りました。その気付きから、学生である自分でも学生という規模を生かしできることがあると理解できました。

本大会やワークショップへの参加を通して、初学者である私たちに対して様々な方に温かく真摯に接していただき感謝しかありません。これから心理職として臨床現場に携わっていく中で、自分だからこそできること、難しいことという視点を忘れないようにしていきたいです。